

子どもの頃、縁日で幼馴染と一緒にひよこを買った。彼のひよこは雄々しい雄鶏に育った。

私のひよこは畸型になった。もともと背骨が曲がっていたのだ。ひよこのうちは、注意深く見ても気づかぬ程度だった。成長するにつれ、背骨の湾曲は、誰の眼にもはっきりと分かるほど醜いものになった。

私は自分の鶏を憎んだ。いや、それ以上に幼馴染の鶏を憎んだ。ふたつの鶏は、幼い私の胸裡に、簡単には洗い流すことのできない染みを作ったのだ。不愉快極まりない。

私はどうしても胸裡の染みを消さなくてはならなかった。私の人生に染みがあることは許せない。それがたとえ、どんなに些細な染みであったとしても。

私は試みに、鶏の頭をブランコの柱に結わえ付け、尻尾の付け根を自転車の荷台に縛り付けた。自転車のペダルを力いっぱい踏みこんだ。尻尾を縛った紐が抜けてしまい、なかなかうまくいかなかったが、何度目かの試みで、遂に鶏を左右に引張ることができた。

脊椎の湾曲は矯正できなかった。鶏はあっけなく死んでしまったのだ。鶏の死骸を前にして、明らかに胸裡の染みの一部が消えたように感じられた。妙な高揚感を覚えた。

幼馴染の家に鶏がいる限り、染みを完全に消し去ることはできないのだと分かっていた。彼の一家が旅行に出かけている隙に、私は鉈を手にして鶏小屋に忍びこんだ。

鶏の首は簡単に刎ねることができた。首がないまま、鶏はひとしきり鶏小屋の中を走り回った。次第に走る力が弱まり、最後は横倒しに倒れて、こと切れた。雄々しい鶏の生命が、この世から消えていく瞬間、私はかつてないほどに興奮したことをはっきり覚えている。

知らないのなら、教えてやろう。形あるもの、形ないもの、この世の森羅万象がその姿を留めなくなる瞬間、それはまさに神と触れ合う瞬間なのだ。それは、自分自身の魂が、消えてなくなるものと一緒に未知の深淵に吸い込まれていくような、言いようのない神々しさ、恐怖に身が震える瞬間でもある。

想像してみたまえ、きみの愛する人が亡くなる瞬間を。その人の死を自分自身が支配している瞬間を。それはどんな韻文や絵画、音楽でも教えてくれない崇高な感動を与えてくれる瞬間なのだ。

私は、自分の鶏を殺し、幼馴染の鶏を殺したときに、幼くしてこの世には最高の芸術が存在することに気づいてしまった。芸術などという言葉を知る前から、私はその神髄に辿り着いてしまったのだ。

勿論、この崇高な感覚は誰にでも理解してもらえないことも知っている。後年、織部に出会ったとき、私はようやく知己を得たと感じたものだ。

なんでもない、つまらないものを割っても感動は薄い。精魂込めて創り上げた器を割る時の感動は、モーツアルトにすら優る。

私は信大で村上に出会った。村上は真面目な優等生というだけで、何の取り柄もないつまらない人間だった。私の中に密かな愉しみが芽吹いた。

同じころ、信大前のバス停で諒子を見かけた。美人だと思っただけで、格別の思いは持たなかった。すぐに考えを変えた。村上に対して密かな愉しみを抱いたように、諒子に対しても密かな愉しみを抱こうと決めた。

自分が積極的に創るようにすれば、この世にはいくらでも愉しみが転がっているものだ。私は村上との間に友情を築きあげ、諒子には愛情を注ぐことに決めた。時間をかければかけるほど、最後の感動はうっとりするほど素晴らしい物になるだろう。魅惑の瞬間を手に入れるため、私は周到に作品創りを始めた。

正直に白状すると、諒子との間では駄作しか創れなかった。これは、私の恋愛経験の未熟さによるものであろう。私は彼女の恋人になりたかったのだが、単にストーカーと思われただけだった。これでは全く意味がない。

村上との間では確実に作品を創り上げることができた。彼の親友は、もはや私ひとりだけになっていった。その友情を壊す瞬間を思い描くだけで、身体中の細胞が眼を醒ます思いだった。

私は諒子を諦めた。もはや作品として成り立たない。計画を変更した。彼女を独立したひとつの作品とするのではなく、村上との作品を、より完成度の高いものにするための布石になってもらうことにした。

諒子の就職先を知っていたので、教授に頼んで、そこに推薦してもらった。村上を誘うと、何を不審がることもなく私に従った。彼は私を完全に信頼し切っていた。私は彼が好きだった。ふたりは完全に親友になっていた。最後の瞬間、どんなにうっとりするかと思うと眩暈がするほどだった。

諒子は美人だったので、村上が夢中になることは分かっていた。意外だったのは、諒子のほうでも村上を気に入ったことだ。美人との間を必死に取り持とうとする友人という役割だけで、十分に友情を膨らませられると思っていたのだが、キューピッドはよほど私に至福のときを味わわせたいと思ったのだろう。ふたりは結婚してしまった。

諒子はいけない。あるとき彼女は私に電話してきた。自分に不愉快なものを送りつけたストーカーの正体は、私ではないのかと疑っていた。彼女がなぜ、私の正体に気づいたのか、心当たりがないわけではなかった。村上に贈った金接の器と、諒子に贈った金接の礫山を結び付けたのだろう。諒子は勘のいい女だ。それだけに危うい。村上との友情は、機が熟したときに私自身が壊さなくては意味がないのだ。誰にも邪魔はさせない。

私は監視を始めた。

ストーカーと間違えられるくらいだから、人を監視するのは私の得意とするところなのかもしれない。ネットで小型の隠しカメラや盗聴器など、便利な道具が簡単に手に入るの、私の監視能力はさらに磨きがかかっていった。どうやら諒子は小賢しい正義感を振りかざし、安曇トマトファームの不正を告発するつもりでいるらしいと分かった。

あの日、諒子が宮崎に詰め寄るところを、私は隠しカメラの映像で見っていた。彼女を翻意させることができないと分かって、宮崎が笠原に泣きつくところも、別のカメラで見て

いた。笠原は顔色を失い、卒倒しそうだった。なんとか身体を支えながら、諒子を今夜自宅に呼び出して説得すると言った。盗聴器で聞いた。

これは好機だと思った。諒子がひとりで夜道を歩くことになる。行動に移す前に最後の確認だ。私は村上に電話した。私の金接を彼女に見せていた。はっきりした。彼女は私を疑っているのではない。確信しているのだ。

諒子は安曇トマトファームから直接笠原の自宅に向かった。あとをつけ、笠原の自宅前で諒子を待った。二時間経って、彼女が出てきた。その様子を見れば、長い時間をかけた説得が奏功しなかったことは、明らかだった。

歩いていく諒子に駆け寄った。近づく足音に驚いて振り向いた顎を、左手で掴み、声が出ないようにした。右手で首を絞め、抵抗する力を奪い取った。ぐったりしたところで、頸部に臭化。パンクロニウムを注射した。

あとは車が来るのを待っていればいだけだった。ここで私は面白いことを思いついた。諒子の望みを叶えてやろうと思った。今生の最後の望みなのだ。安曇トマトファームの不正が明らかになる契機をつくってやろうと思った。

諒子の携帯電話から宮崎に電話した。笠原が諒子を殴って逃げるのを見たと言った。安曇トマトファームの経理のことで、言い争っていたと付け加えた。早く駆けつけたほうがいいと念を押した。

やましいことがあり、それを指摘されると、人は簡単に騙されるものだ。案の定、宮崎は名乗りもしない不審な電話に呼び出されてやってきた。

鼻もちならない女だったが、最期に私に少なからぬ感動を与えてくれた。美しい身体が自動車によって打ち砕かれる瞬間、私は射精していた。驚喜の声をあげそうだった。感謝する。お返しに安曇トマトファームの不正が闇に葬られないようにしてやったから、安らかに眠ってくれ。

宮崎が取り調べを受ければ、笠原の関与も経理の不正も一切合切、明らかになるだろう。私は射精しながら、ここから諒子の冥福を祈っていた。

迂闊だったのは、恍惚感に酔い痴れ、危うく宮崎に姿を曝すところだったことだ。その足音が近づいてきたところで、すぐに身を伏せたが、こちらを見ていたような気がする。「お義父さん？」と訊いてきたが、じっとしていたら、そのまま諒子のほうに行ってしまった。気のせいだと思ったようだ。

残念ながら、彼女の望みを叶えてやることはできなかった。宮崎の忠義が人並み以上だったのか、警察が無能過ぎたのか、理由はいくらでもあるだろう。安曇トマトファームのことは何も表に出ず、宮崎が収監されただけで終わった。

諒子が死んだ後、私は気落ちする友人を慰める親友の役割をみごとに演じ切ったと思う。村上の勘違いに乗って、復讐の手助けまでした。もはや村上は、私なしには生きていけないだろう。諒子を殺したのは私だと白状するときの彼の衝撃を想像すると、身体が溶けそうなほどうっとりする。

あの日、私は宮崎として西開放寮の居室に忍びこんでいた。五時の巡警の後、倉庫に行った。ポリエチレンの網を切り裂き、舎房の外に出た。寝静まる希望寮の脇を通って、裏の農場に出た。林の中に隠した服に着替え、源氏山ゴルフカントリーに向かった。駐車場に停めっ放しにしていたカローラを、甘露寺の先の小路に移動した。その後で、ゴルフ場の駐車場に戻り、もう一台、停めっ放しにしていた車に乗り込んで、市原を後にした。

「ひさ九」で刑務官に遭遇したときには驚いた。あの刑務官が私の計画に気づいたとは思えなかったが、気づいていたとしたら、心が躍る。そんな奴なら、ぜひと殺してみたい。村上は笠原まで殺すつもりでいる。笠原殺害を実現させてやるためにも、あの刑務官はいないほうがいい。常連の客に向かって、マスターがしばらく店を休むと話していた。その間、刑務官にはトイレの中に入れてもらおう。

トイレの梁の上を見ると錠前が置いてあった。ツルは開けたままになっていた。何の変哲もないありふれた錠前だ。もつとも錠前に何種類もあるとも思えないが。

近くのホームセンターで錠前を購入した。「ひさ九」に戻り、購入した錠前のツルを開いて、梁の上の錠前と交換した。店の中に入って、刑務官が出ていくのを待った。

刑務官の後を追った。付近に人がいないのを確認して刑務官に声をかけた。振り向いたところで顎を掴んで上に向けた。開いた首に注射針を刺した。刑務官の死体は、近くの公園に運んだ。タコの形をした滑り台があったので、その中に隠した。

深夜、村上に気づかれぬように起きだして、公園に戻った。村上は凡人だから私の崇高な趣味を理解できないだろう。復讐の殺人ですら、嘔吐しかける奴だ。刑務官殺害を厭がるだろう。そんなことで友情に亀裂が生じたら、それを壊す愉しみが半減する。

刑務官を背負って「ひさ九」のトイレに向かった。トイレには私がすり替えた錠前がぶら下がっていた。錠前を開け、中に死体を放り入れた。本来の錠前を掛けた。このトイレのドアが開くのは、マスターが旅行から帰るときだ。一週間後だ。時間は稼げる。私が入れる筈のないトイレに死体があれば、村上が疑いを持つこともない。

笠原殺害については、今さら何も言うことはない。村上が手記に書いたとおりだ。

重ねて言うが、精魂込めて創り上げたものを壊すときの感動に優るものはない。その感動は、善だとか悪だとか、人が作りだしたちっぽけな道徳など、遥かに超越しているのだ。真の芸術の前にはすべてがひれ伏す。

私がこの手記を公表しようと思いついたのは、ただひとつの理由からだ。真の芸術を広く知ってもらうためにほかならない。市原刑務所での事件の細部が明らかになっていくのとは裏腹に、一連の事件にこめた私の芸術性への理解が全くなされていなのが、無性に腹立たしいからだ。

村上が警察やマスコミに送りつけた手記の中には、私が事件に込めた芸術性を示唆する言葉が、あちこちに散りばめられているというのに、世間はそれに気づいていない。あまりにも愚かすぎる。頭の悪い連中が、勝手に事件を読み違え、愚かな発言をしているのを黙って見過ごすわけにはいかない。

ちなみに村上には全てを伝えた。彼はもうこの世にいない。以上だ。